

陳舜臣さんを語る会通信

NO.101 Mar. 2023

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橋雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel.078-911-1671

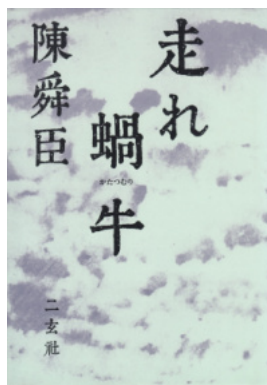
編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2023年3月20日

<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

『走れ蝸牛』^{かたつむり} 全日空機内誌連載エッセイ24編、産経新聞連載エッセイ46編を収録

本号紹介『走れ蝸牛』(1991 二玄社)の初出は下枠内「あとがき」のとおりです。なお、全日空機内誌『翼の王国』連載は1989年1月～翌年12月で、産経新聞連載は1986年1月～12月です。(編集委員 橋雄三)



二玄社版表紙

『走れ蝸牛』(二玄社)「あとがき」
(最後の二行削除)

小見出し、傍線は編集委員の加筆

初出、及びエッセイ集のタイトル

本書に収めたエッセイは、第一部が全日空の機内誌『翼の王国』に、二年にわたって連載したものである。べつにシリーズを通してのテーマもなく、気のむくままに書けばよいとのことであったが、おもな読者は旅行中の乗客なので、旅に坎んすることがやや多くなつたようだ。

第二部が産経新聞に連載したもののだが、通しのタイトルは「走れ蝸牛」としたけれども、やはり気のむくままに書いたエッセイである。

気のむくままに書いたエッセイの集にタイトルをつけるのは難しいが、せつかく第二部に「走れ蝸牛」をいう題をつけていたので、そのまま使うことにした。

一九九一年九月 陳舜臣

タイトル『走れ蝸牛』

産経新聞連載「走れ蝸牛」の第一回は一九八六年一月六日朝刊(左の画像)で、以降、月曜日毎、同年末まで、四十六回続きました。この連載の題がエッセイ集のタイトルになっています。

第一回「ウシ、ウシ、ウシ」

第一回「ウシ、ウシ、ウシ」の内容に触れます。

陳舜臣氏は北京で、知人の中国人作家に会い、宴席で、起句が、

牛年 再び逢う 孺子の牛
という詩を贈られます。

走れ蝸牛 カタツムリ

＜1＞

カタツムリのようだ

イラスト・山本 一身

上海魯迅紀念館の展示より 編集委員撮影

孺子(子供)の牛ということばは『春秋』に見えるが、現在では、魯迅の句で知られている、として、

眉を横たえて冷やかに
千夫の指に對し
首を俯れて甘んじて
孺子の牛と為る

をあげます。

詩を贈られると、「韻」ほか、いくつもの条件をクリアした詩を返さねばなりません。陳さんは、ご馳走を前にしても、心が落ちつきません。

徘徊して踐歷
蝸牛に似たり



という句を得て、やっと、料理がのどを通ります。

『含笑花の木』に記述がある『美食家』及び『わたしの北京風物誌』紹介

陸文夫著 陳謙臣訳『美食家』(松籟社 1987)及び李順然著『わたしの北京風物誌』(東方書店 1987)が『含笑花の木』に取り上げられているわけは、共に、陳舜臣さんと関連があるからです。どういう関連か？本の内容は？の二点でここに紹介いたします。

(編集委員 橘雄三)

陸文夫著 陳謙臣訳『美食家』

(松籟社一九八七)



松籟社版の表紙

『含笑花の木』でこの本を取り上げているわけは、翻訳が、陳舜臣さんの弟の謙臣さんで、そして、陳さん自身が監訳し、序文も書いておられるからです。そしておまけは、巻末の解説が同じ華僑仲間の周達生氏であることです。

『美食家』の舞台

『含笑花の木』「陸文夫『美食家』日本語版によせて」は、前掲書「序文」の転載です。

『美食家』「序文」から引用します。

「(中国作家協会副主席の馮牧氏は)蘇州で陸文夫氏を知らない人はいない」とおっしゃった。これは言いかえると、陸氏は蘇州のまちの隅々まで知っているということであろう。

その蘇州が『美食家』の舞台になっている。

主な登場人物

●朱自治(ツウツイーエ) 不動産資本家。父親は、やり手の不動産業者だった。抗日戦争前に上海で手びろく不動産取引所をひらき、上海に家をかまえ、蘇州にぼう大な財産を買いおいていた。朱自治は蘇州の財産を受け継いだ。一九二〇年代末期の二階建て洋風建築に住む。

●わたし(高小庭 カウシャウティン) 狂言回し。貧乏学生。抗日戦の終わりごろ父が亡くなったあと、母と一緒に、親戚筋の朱邸に引っ越し、洋風建築の前の平屋の一部屋に住み込む。部屋代を納めないかわりに、朱家の門番を兼ね、母が朱自治の家事まかないを手伝うというきまりになっていた。

美食家 朱自治の一日

【朝食】 朱自治の一日は、「はやく朱鴻興(ツウホンキン)へいって頭湯麵(トウタンメン)を食わねば！」というところからはじまる。月極めで雇っている人力車に乗りこみ、麵屋・朱鴻興へ向かう。朱自治は、何杯もの麵を通した麵湯くさい麵を食べる気がしない。頭湯麵、つまり、いちばんそばでないとい日気分がすぐれないのだ。

あと、【茶楼】【昼食】【フロ屋】【夕食】というのが朱自治の一日である。これを一つ一つ詳述することは控えよう。

李順然『わたしの北京風物誌』

(東方書店一九八七)

『含笑花の木』「李順然『わたしの北京風物誌』によせて」は、前掲書「序」の転載です。「序」から抜粋引用します。

東京生まれの李順然さんは、江戸っ子を二十年やったあと、北京人を三十年やったことになりました。

私は北京へ行くたびに、李順然さんと会い、酒をくみかわして語り合います。李さんは私の妹と放送局の同僚で、また李夫人は私の妹と無二の親友という間柄です。

■陳舜臣さんの妹・妙玲さんは五三年、「祖国建設の情熱に燃え」とはいえ、まだ、二十歳になったばかりの若さで家族と離れ、第一回華僑帰国船興安丸で大陸に渡りました。左の画像(個人蔵)は出発時の妙玲さん。

『わたしの北京風物誌』
表紙及び内容紹介

十二月、月ごとに北京の風物を紹介しています。例えば、一月なら、

- ・「中国的師走」
- ・「緑」の引っ越し
- ・北京っ子と風邪



三根湯(サンゲンタン) 初期の風邪に効く

・涮羊肉と砂鍋白菜
・烤肉宛と烤肉季
・千年の王城の新生

といった項目が並び、ところどころ、張紅さんのさし絵が目を楽しませてくれます。